

# 山形大学附属博物館

YAMAGATA UNIVERSITY MUSEUM 2018.3

館報 44

## 目次

### 《展示活動》

- 特別展「山形大学附属博物館ものがたり 収蔵品が語る 90 年のエピソード」  
.....押野 美雪 (1)
- 特別展「山形と沖縄をつないだ琉球漢詩文—近代山形最初の郷土史家、  
伊佐早謙が収集した「林泉文庫」の世界—」  
.....須藤 静香 (7)
- オープンキャンパス特別展「没後 200 年記念 山形の算聖「会田安明」の軌跡」  
.....佐藤 琴 (12)

### 《地域との協働》

- 市民との協働活動 ボローニャとの交流活動 .....佐藤 琴 (13)

### 《調査研究活動》

- 国際シンポジウム .....佐藤 琴 (15)

### 《報告》

- 「新編最上義光事歴」の再発見 .....押野 美雪 (17)
- 平成 29 年度事業報告 ..... (19)

### 《展示活動》

特別展「山形大学附属博物館ものがたり 収蔵品が語る 90 年のエピソード」

押野 美雪 (附属博物館学芸員)

#### 1. はじめに

本展覧会は 2017(平成29) 年度第1回特別展として企画した。会期は 6 月 12 日 (月) から 8 月 18 日 (金) まで [46日間]。当館は山形県師範学校時代の郷土室がルーツとなっている。以来、今に伝えられた収蔵品を紹介しながら、近代教育が始まった明治時代にまで遡る山形大学の歴史を振り返る展覧会である。期間中、オープンキャンパスの開催日と重なることから、高校生にも興味を持ってもらえるようキャプションにリードをつけるなど親しみやすい解説を意識した。

## 2. 開催概要

主 催：山形大学附属博物館

会 期：2017年6月12日(月)～8月18日(金)[46日間]

休 館 日：土・日・祝日(ただし、8月11日(金・祝)はオープンキャンパスのため開館)、8月14日(月)～16日(水)

来場者数：5,191人

## 3. 各章のテーマと展示物

展示構成は以下の通りである。博物館入ってすぐの大学紹介のエリアを第一章に替え、第二章から四章までを特別展示室で行い、その他を美術コーナーで行った。また、常設展の資料を一部特別展示に替え、それに合わせてキャプションも特別展仕様に変更した。

第一章 先輩たちのキャンパスライフ

第二章 136年前の山形と学校

第三章 三浦新七博士と長井政太郎館長

第四章 郷土室から博物館へ

第五章 大正時代—芸術家たちの軌跡—

第六章 展示室から大学の外へ

### 3.1. 先輩たちのキャンパスライフ

本学は1949(昭和24)年に山形高等学校(1920(大正9)年)、山形師範学校(1978(明治11)年)、山形県実業補習学校教員養成所(1922(大正11)年)、米沢工業専門学校(1910(明治43)年)、山形県立農林専門学校(1947(昭和22)年)を設立母体として発足した。当時、山形高等学校(以下山高)は山形市小白川町(現小白川キャンパス)、山形師範学校は緑町(現教育資料館)にあった。開学当初は山形師範学校校舎も教育学部の校舎として使われていたが、1963(昭和38)年に小白川キャンパスに移転した。

第一章では、前身校から引き継いできた資料や、大学誕生当初の学生生活をうかがえる資料から山形大学(以下山大)の歴史を紹介した。山高校舎写真を中心に、そこから右手に師範学校関係資料、左手に山高及び開学初期の山大資料を展示した。師範学校については、1907(明治40)年の生徒成績品から師範学校校舎平面図、1930(昭和5)年の卒業生が作った校舎模型など、校舎の変遷が分かるような展示とした。この他、第二次世界大戦末期の山高入学関係資料を卒業生から借用することができた。これは山高生の勤労働員の状況がわかる資料であり貴重である。



第一章展示風景

### 3.2. 136年前の山形と学校

第二章では、山形県の近代教育の始まりとこれを主導した統一山形県初代県令三島通庸について紹介した。三島は山形県内の橋や道路を改修・新築し隣県との交通・流通を向上させた。さらに、県内の教育面にも力を注ぎ、朝暘学校、南山学校、師範学校などの学校建設にも尽力した。この近代化事業を記録するために三島の要請を受けて山形、福島、栃木三県を描いたのが洋画家高橋由一である。由一は1881(明治14)年から1887(明治20)年までの6年間で計3回来県し、『三島県令道路改修記念画帖』を完成させた。

このコーナーでは、長谷川竹葉《山形県新築之図》、高橋由一《三島県令道路改修記念画帖 其之三 山形県之巻》から《山形県庁前》、菊地新学《明治14年撮影の山形市街》を展示した。木版、石版、写真の

それぞれ異なる手法で表現された県庁とその周辺を見比べることで近代化され始めた山形県の姿を紹介した。

### 3.3. 三浦新七博士と長井政太郎館長

三浦新七(1877～1947：明治10～昭和22)は山形県の経済界と文化振興の指導者として活躍した人物である。山形市旅籠町に生まれ、山形尋常中学校卒業後、東京高等商業学校(現一橋大学)に学んだ。専門は経済史で、25歳には母校の講師となり、商業学、商業実践の科目を担当した。1927(昭和2)年の金融大恐慌が起こると、三浦は東京商科大学教授の職を辞し家業を継ぎ両羽銀行(現山形銀行)頭取となり山形金融界の経営再建に尽力する。一方、1928年には山形県郷土研究会を発足させ、会長に就任した。三浦は研究テーマや方法について会員に指導するだけでなく、資金の援助を全面的に引受け山形県の文化面を育てた。



第二・三・四章展示室風景

また、三浦博士に見いだされ、山形県内の地理学、歴史学に功績を残した人物が長井政太郎(1905～1983：明治38～昭和58)である。長井は山形県西村山郡柴橋村(現寒河江市大字中郷)に生まれた。1930年に山形県師範学校教諭として母校に勤めながら三浦の指導する山形県郷土研究会に所属し地域史研究の分野に大きな足跡を残した。1952(昭和27)年、長井は山形大学附属郷土博物館の初代館長に就任。1970年まで館長を勤めた。

この二人に関係する資料として《山形県教育展覧会記念写真帳》と《宮城山》を展示した。山形県教育展覧会とは、教育に関する成果物や参考品を紹介し今後の発展を図るための展覧会である。1927年、山形市第四尋常高等小学校(現山形市第四小学校)および新築の山形県教育会館を会場として行われた。このとき、教育会館では西村山郡役所にあった県郷土博物館から資料を移管した山形県郷土博物館が開館した。《山形県教育展覧会記念写真帳》には、この展覧会と開館当初の山形県郷土博物館の写真が収められている。

その後、1945(昭和20)年に教育会館は海軍に徴用され収蔵資料は師範学校の長井の元に受け入れられた。その中には《山形県教育展覧会写真帳》に写る《宮城山》や土人形も含まれていた。これらは長井の元から郷土室に移り、現在当館に伝わっている。また、三浦が収集した隠れキリシタンの十字架や羽黒鏡等も同じ経緯をたどっている。

ここでは、90年前の《宮城山》の写真と、現在の《宮城山》を合わせて展示し、時代の流れや当館のコレクションの成り立ちを紹介した。

### 3.4. 郷土室から博物館へ

附属博物館は師範学校時代にできた郷土室時代から数えて5回以上の引越しをしている。残された写真や記録、資料から附属博物館の歴史の一端を振り返った。

第四章では、郷土室時代から多岐にわたって集められた資料から教育にまつわる資料を紹介した。現在のようなインターネットや視聴覚資料が乏しかった時代、教育の場で用いられた教材教具は掛図や実物標本、模型標本であった。当館にも旧山高所



《歴史人形》

蔵の掛図や人体骨格標本が伝わっている。その他、明治時代末期から「世界人類風俗人形」「日本歴代服飾模型」などの名前で販売されていた土人形を展示した。同様の資料は福岡県立福岡中央高等学校、金光図書館、東京大学等が所蔵している。当館所蔵の「世界人類風俗模型」「歴史人形」も井上清助が製作販売した井上式地歴標本である。

## 2.5. 大正時代—芸術家たちの軌跡—

第五章では、大正時代の作家による美術資料とその研究成果を紹介した。本学には校舎の移転、教職員の世代交代により、その来歴や由来が失われてしまった備品がある。当館ではこれらを調査しその研究成果を学内外に発信することに取り組んできた。

川崎繁夫《閃光》は作者不明のまま長い間ふすま同窓会会館に保管されていたが、当館学芸研究員の調査により、2002(平成14)年に山形県出身の彫刻家・川崎繁夫の帝展入選作であることが分かった。また、2007(平成19)年の理学部改修工事をきっかけに発見された満谷国四郎《白石島》も当館学芸研究員によって画家が特定された。



第五章展示風景

## 2.6. 展示室から大学の外へ

現在、公開講座は大学などの教育機関、博物館、公民館などで広く行われているが、大学が開く公開講座は1964(昭和39)年の文部科学省大学学術局長、社会教育局長通知(「大学開放の促進について」)を端緒とし、長年にわたって推進されてきた。

当館主催の公開講座は1981(昭和56)年にスタートし、2013(平成25)年までの34年間の間31回開催している(1985、1994年は開催せず)。第一回公開講座「生活とエネルギー」の報告書の中で当時の館長川副武胤は博物館の活動をどう外へ普及発信していくかを検討していたこと、3年前から公開講演という形で始め、徐々に拡充させ、大学全体の各学部の関係教官に講師を依頼する「公開講座」にしていった経緯を語っている。その後も総合博物館の特徴を生かした多岐にわたるテーマと多彩な講師陣によって公開講座は好評を博した。ここでは、歴代の公開講座のポスター、および報告書などを展示した。



第六章展示風景

## 3. 関連行事

### (1) オープンキャンパス特別企画

オープンキャンパス(8月11日)に合わせて特別企画「初代館長に続け! あなたのイチオシはどれ? 展示資料人気投票!」を開催した。当館が選んだ15点の展示資料の中から、気に入った資料を選び投票してもらった。参加人数は535名であった。

### (2) 特別展示

小白川図書館所蔵の《広開土王碑拓本》、《物部守屋大連之碑拓本》を特別展に合わせて展示した。これらの拓本は2011年図書館の書庫で発見された。山高か師範学校から伝わったものと推測されており、第20回大学博物館等協議会・第12回日本博物科学会の会場でもある図書館に展示した。詳細は以下の通り。

期 間：2017年6月20日(火)～30日(金)

会 場：小白川図書館1階

開館時間：平日(8時15分～21時)、土日(11時～18時)

#### 4. 成果と課題

『山形大学附属郷土博物館報 No.2』の長井政太郎「郷土博物館成立の思い出」や資料ラベルから西村山郡郷土博物館の資料が旧山形県教育会館の山形県郷土博物館に移り、戦後当館に伝わっていることはわかってきた。しかし、当時の目録などは伝わっておらず、資料点数が『財団法人山形県教育会館史』に記載されている他は、同書のグラビアに載る不鮮明な展示室内写真のみであった。

今回、資料調査をする中で、《山形県教育展覧会記念写真帖》に山形県郷土博物館展示室の鮮明な写真があることがわかった。さらに、写っている《相良人形 宮城山》、《鶴岡瓦人形 恵比寿》、《相良人形 犬》が現在当館に伝わっている土人形と同じものであると確認できた。

従って、これまで不明であった資料の来歴と、資料の最も古い展示風景写真が見つかったことになる。これは山形県郷土博物館所蔵資料が当館に伝わっていることを裏付けるものでもある。

今後の課題としては、本展のための資料調査で整理された「裁縫雛形」や「生徒成績品」のさらなる調査とその公開、展示を考えていきたい。



オープンキャンパス



人気投票結果

#### 参考文献

國方敬司編「三浦新七博士—その人と軌跡」財団法人三浦新七博士記念会(2008)

長井政太郎「郷土博物館成立の思い出」、『山形大学附属郷土博物館報』No.2, 山形大学附属郷土博物館(1975)

槇 昭一「紙碑：長井政太郎先生のご逝去を悼む」、『歴史地理学』123号, 歴史地理学会(1983)

『財団法人山形県教育会館史』財団法人山形県教育会館(1987)

『郷土研究資料目録並解説』山形縣師範学校(1933)

『山形大学附属博物館 40年のことども』山形大学附属博物館(1994)

山形新聞「四万点を楽に陳列 山大付属博物館旧師範を改築」1957年6月27日 朝刊

山形新聞「山大の郷土博物館でき上る 資料五万点に及ぶ ちかく一般にも公開」1958年11月24日

山形新聞「民具の部屋をつくる 県内の各地から二百点」1962年11月17日

資料リスト

	資料名	作者/採集者	年代	材質・技法/ 採集地・出土地
1. 先輩たちのキャンパス ライフ	一体型机椅子			
	学帽			
	旧山形県師範学校校舎模型		1960(昭和35)年	
	教員肖像写真帳 (モニターでスライドショー)		1941~44(昭和16~19)年	
	号鐘			
	新聞「ふすま」		1946(昭和21)年	
	生徒成績品 (3点)		1907(明治40)年	
	卒業記念アルバム (モニターでスライドショー)		1930(昭和5)年	
	注意書き (4点)			
	入学および勤労働員関係資料 (4点)		1945(昭和20)年	
	火鉢			
山形県師範学校創立30年祝典記 念絵葉書		1908(明治41)年		
山大旧校舎	長野亘	1971(昭和46年)	紙・水彩	
2. 140年前の山形と学校	御巡幸御行列図	武田治郎吉	1881(明治14)年7月	木版彩色
	三島県令道路改修記念画帖 其 之三 山形県之巻	高橋由一(1828~94)	1885(明治18)年	絹本石版手彩色
	三島通庸子愛用鍋焼貝			
	明治14年撮影の山形市街	菊地新学(1832~1915)	1937(昭和12)年複製	印画紙
	山形県庁御新築諸人足並諸事控 山形県新築之図	長谷川竹葉	1881(明治14)年	木版彩色
3. 三浦新七博士と長井 政太郎初代館長	相良人形 犬		~1927(昭和2)年	粘土・素焼き・彩 色
	相良人形 宮城山		1922~27(大正11~昭和2)年	粘土・素焼き・彩 色
	鶴岡瓦人形 恵比寿		~1927(昭和2)年	粘土・素焼き・彩 色
	山形県教育展覧会記念写真帖		1927(昭和2)年	
4. 郷土室から附属博物館 へ	エンボッサー「山形大学印証」			金属
	オコジョ(夏毛)			
	柏倉門伝出土の銘有五輪塔		1413(応永20)年	石
	カムチャッカ産鮭鱒の種類		1935~43(昭和10~18)年頃	印刷
	記号番号表			
	寄生虫の液浸標本 (8点)			
	県内発見の十字架			石膏・黒塗り
	穀類標本 (30点)			
	故三浦新七博士寄託の羽黒鏡			青銅
	最新山形県大地図	登山俊彦	1964(昭和39)年11月1日	印刷
	裁縫雛形 (5点)		1935(昭和10)年以降	
	蔵王山模型	山形県師範学校	1921~43(大正10~昭和18)年頃	紙・石膏
	慈恩寺出土の蕨手刀		奈良時代	寒河江市箕輪遺跡 (旧西村山郡醍醐 村)
	人体骨格標本	島津製作所	~1944(昭和19)	
	世界人類風俗人形 (9点)	井上清助(1867~1922)	明治末~昭和初期頃	粘土・素焼き・彩 色
	土器片 (5点)		1942(昭和17)年	来迎寺遺跡(北村山 郡大石田町大字横 山字来迎寺)
	鳥の巢標本	星川清二		
	被服標本 (5点)		昭和40年代	
	舞童帳		1514~49(永正11~天文18)年	
	蘭標本 (10点)			
	マングローブ植物花粉化石			
焼き印			木・金属	
山形県大地図	信用堂	1935(昭和10)年	印刷	
山形市街図		昭和初期	印刷	
山形師範学校之印	耕生	1948(昭和23)年春	石・篆刻	
ライチョウ(夏・冬羽)	島津製作所			
歴史人形 (25点)	井上清助(1867~1922)	明治末~昭和初期頃	粘土・素焼き・彩 色	
5. 大正時代一芸術家たち の軌跡一	銅鷹	根上富治(1895~1981)	1922(大正11)年	絹本着色
	白石島	満谷国四郎(1874~1936)	1921(大正10)年	麻布油彩
	閃光	川崎繁夫(1892~1924)	1920(大正9)年	石膏着色
	母子	新海竹蔵(1897~1968)	1915(大正4)年	石膏着色
6. 展示室から大学の外へ	公開講座「山と生活」(2点)		1989(平成元年)	
	公開講座ポスター(26点)			
	生活とエネルギー講義要項・報 告書		1981(昭和56)年	
	博物館資料写真I		1958~60(昭和33~35)年頃	
	博物館に遊ぶ講義要項・報告書		1982(昭和57)年	
パンフレット(3点)		1972(昭和47)年、73(昭和48)、 93(平成5)		
名前のない資料たち	三羽の鶴が描かれた壁の一部?	?	?	土?

## ≪展示活動≫

### 特別展「山形と沖縄をつないだ琉球漢詩文 —近代山形最初の郷土史家、伊佐早謙が収集した「林泉文庫」の世界—

須藤 静香（附属博物館学芸員）

#### 1. はじめに

当館では、毎年秋に特定のテーマに沿った「特別展」を開催している。ここでは2017(平成29)年10月6日(金)～11月14日(火)[32日間]開催した「山形と沖縄をつないだ琉球漢詩文—近代山形最初の郷土史家、伊佐早謙が収集した「林泉文庫」の世界—」について報告する。本展は近代山形最初の郷土史家、伊佐早謙が収集した林泉文庫に収められた貴重な琉球・沖縄関係資料を公開する県内初の試みである。資料の活用はもとより、展示を通して山形と沖縄のつながりを広く紹介するとともに、山形師範学校で教鞭をとった伊佐早のさまざまな業績を顕彰することを目的とした。主催他概要は以下のとおりである。

主催：山形大学附属博物館、小白川図書館

後援：日本中国学会第69回大会準備会

協力：うるま市立中央図書館・市立米沢図書館

会期：2017年10月6日(金)～11月14日(火)[32日間]

会場：山形大学附属博物館、小白川図書館

(小白川図書館)

休館日：なし

開館時間：8時15分から21時まで(平日)、11時から18時まで(土日祝日)

(附属博物館)

休館日：土曜、日曜、祝日(ただし、10月7日(土)、8日(日)、14日(土)、21日(土)、22日(日)、28日(土)は臨時開館日とする。)

開館時間：9時30分から17時まで(平日)、11時から17時まで(土日)

来場者数：2,942人

関連行事：(1)ギャラリートーク

日時：2017年10月6日(金)17:00～17:40、5日(土)12:30～13:10

講師：高津 孝(鹿児島大学法文学部教授)

会場：小白川図書館1階

参加者：6日 35人、7日 41人

(2)特別講演会「伊佐早謙と林泉文庫 —知の巨人とその蔵書—」

日時：2017年10月19日(木)16:30～18:00

講師：青木 昭博(市立米沢図書館郷土資料担当)

会場：人文社会科学部1号館1階103教室

参加者：75人

#### 2. 本学に収められた林泉文庫

伊佐早謙(1858～1930：安政5～昭和5)は、近代山形の郷土史家として様々な業績を残した。1890(明治23)年から晩年まで上杉家記録編纂所の総裁を委嘱され、『上杉家御年譜(茂憲公)』『鷹山公遺事』等の執筆にあたっている。伊佐早が収集した「林泉文庫」は米沢藩関係の書籍・古文書および和漢の古典籍からなる一大コレクションである。伊佐早の死後、遺言により蔵書は一度上杉家に寄贈され、1938(昭和13)年以降、市立米沢図書館に寄託されていた。戦後1954(昭和29)年に市立米沢図書館、瑞龍院龍門図書館、米沢女子短

期大学附属図書館、本学附属図書館(現小白川図書館)の教育学部分館がそれぞれ購入した。数所に分散して収蔵されたため、膨大な文庫の全体像が見えにくくなっている。本学では、和・漢の古典籍を中心に収蔵している。資料の登録は、1955(昭和30)年11月に完了し、その後は書庫内で保管されてきた。本学が書籍を購入した経緯については不明だが、購入に際し同学部所属で初代附属博物館長の長井政太郎教授(1952～70:昭和27～45館長在任)が深く関わっていると推察される。本展では、本館所蔵の約1,170タイトルの中から、貴重な琉球・沖縄関係資料を初めて公開した。本展は4つの章からなり、第一・二章を附属博物館、第三・四章を小白川図書館に割り当てた。各章の詳細は次のとおりである。

### 3. 展示構成

第一章 上杉茂憲と琉球(会場:附属博物館)

第二章 伊佐早謙の様々な顔 郷土史家・漢詩人・教育者・図書館人(会場:附属博物館)

第三章 林泉文庫の世界(会場:小白川図書館)

第四章 うるま市立中央図書館の琉球関係資料調査(会場:小白川図書館)

#### 3.1. 第一章 上杉茂憲と琉球

伊佐早が沖縄へ赴く契機となった米沢藩第13代藩主、上杉茂憲(1844～1917:弘化元～大正6)と琉球の関係について述べている。茂憲は、1871(明治4)年廃藩置県により東京へ移住、その後、英国遊学を終えると「琉球処分」により新たに設置された沖縄県へ1881(明治14)年、第2代県令として赴任した。

茂憲は、師範学校の充実や、県内初の県費留学生の東京派遣などの教育面に力を注いでいる。しかし、民を優先した政策が明治政府の思惑に反した急進的な改革だったため、2年余りで解任。沖縄を去るに際、当時としては破格の奨学資金1,500円を寄付している。このようなことから沖縄では、現在も旧慣の改革を試みた革新的な県令として評価されている。

40年後、茂憲の沖縄における事蹟調査が行われたのは、1924(大正13)年、伊佐早69歳の老年期にさしかかったばかりのころ。本章では、茂憲とその家族や琉球の風景写真をパネルに仕立て、琉球の文化に関する資料を展示し、山形と琉球(沖縄)の関係性を示した。



附属博物館 第一章 上杉茂憲と琉球

#### 3.2. 第二章 伊佐早謙の様々な顔 郷土史家・漢詩人・教育者・図書館人

置賜郡上花沢信濃町(今の山形県米沢市)の米沢藩士の家に生まれた伊佐早は、1890(明治23)年から晩年まで上杉家記録編纂所の総裁を務め、『上杉家御年譜(茂憲公)』『鷹山公遺事』等の執筆にあたった。また、1920(大正9)年に刊行された本県初『山形県史』の編集主任を担っている。漢詩文に精通し、21歳で『鶴城詩集』を編纂、晩年には「樞軒」号で詠んだ漢詩を収めた詩集を出版している。

教育者としては、米沢中学校(今の県立米沢興譲館高校)や山形県師範学校(山形大学地域教育文化学部の前身)の三等助教諭を務め、郷里の人材を数多く育てた。1909(明治42)年には、各界に働きかけ、「財団法人米沢図書館」(市立米沢図書館の前身)の設立に尽力し、亡くなる直前まで、第2代館長として貴重書の収集に努めるなど図書館人としても貢献した。

本章では、伊佐早謙の略歴および様々な事績についてパネルで紹介し、伊佐早が出版した漢詩集『樞軒稿』や米沢藩の藩主や家臣の名言・善行・異才をまとめた人物伝『稿本清覽録』、編集主任を務めた伊佐早の「例言」が付された『山形県史』等の書籍資料を展示した。

#### 3.3. 第三章 林泉文庫の世界



林泉文庫は、伊佐早個人が収集した米沢藩関係の書籍・古文書および和漢の古典籍からなる一大コレクションである。その蔵書は、遺言により一度上杉家に寄贈され、1938(昭和13)年以降、市立米沢図書館に寄託されたが、戦後1954(昭和29)年に市立米沢図書館、瑞龍院龍門図書館、米沢女子短期大学附属図書館、本学附属図書館(現小白川図書館)の教育学部分館がそれぞれ購入した。その結果、数所に分散して收藏されたため膨大な文庫の全体像が見えにくくなっている。本学では、和・漢の古典籍を中心に收藏。1955(昭和30)年11月に登録が完了して以来、館内書庫で眠り続けてきた。師範学校在職の縁もある彼の貴重な蔵書を本学が購入した経緯は不明だが、購入に際し同学部所属で初代附属博物館長の長井政太郎教授が関係していると推察される。

第三・四章は、小白川図書館1階のグループワークエリアを会場にした。会場の出入口上部には、林泉文庫扁額の原寸大パネルを設置し、壁面には伊佐早と山形大学のつながりを紹介するコラムパネル、学生が選んだ琉球漢詩文に関する「学生が選ぶ琉球漢詩文パネル」コーナーを設けた。本コーナーは、授業の一環として伊佐早が出版した『縦軒稿』を読み、その中から気に入った詩を選んで現代語訳を加えたパネル原稿を作成する試みで、制作を通し来館者へ向けた漢詩文への理解を深める一助を担うことを目的としている。場内には10台の展示ケースを設置し、琉球関係資料を中心に展示を行った。

### 3.5. 第四章 うるま市立中央図書館の琉球関係資料調査

本学所蔵の林泉文庫の貴重な琉球関係資料の存在に最初に注目したのは、うるま市立中央図書館の栄野川教館長や鹿児島大学法文学部の高津孝教授らである。2013(平成25)年6・7月に行われた小白川図書館調査では、約28点にのぼる琉球・沖縄関係資料の存在を明らかにした。調査成果は、『蔡大鼎「伊計村遊草」等調査研究事業研究成果報告書』(沖縄県うるま市教育委員会2015年)に詳しくまとめられ、市民対象の小冊子『うるま 漢詩ロード散策』が5号まで発行されている。

2014年3月に開催された史料展示会「蔡大鼎が見つない縁『伊計村遊草』との出会い—大陸と琉球と山形・米沢と—」では、林泉文庫所蔵資料22点(山大20点、米短2点)などが展示され、地元新聞に「琉球関係資料の90年ぶりの里帰り」として大きく取り上げられた。

本章では、うるま市立中央図書館市史編さん係が行ったこれまでの調査事業の成果概要について説明するとともに、本学小白川図書館へ寄贈された、調査研究事業・研究成果報告書および林泉文庫内資料の複製本『北燕遊草』、『呈文集』、『琉球正使毛國棟詩』、『林世功遺稿』、『官生鄭孝徳詩文集』、『意山堂詩集』計6点を露出展示し、来館者が自由に閲覧できるようにした。

## 4. 関連事業

以下の関連事業を実施した。

### (1) ギャラリートーク

講師に鹿児島大学法文学部の高津孝教授をお迎えし、小白川図書館展示エリアで10月6日(金)17:00～17:40、5日(土)12:30～13:10の2回実施した。会場内は、学生や地域住民の参加者で溢れた。また、本展覧会初日から6日(日)まで第69回日本中国学会大会が行われており、学会関係者の姿も多く見受けられた。所要時間は各回40分。琉球の成り立ちから琉球の文化、林泉文庫内の資料について解説していただいた。参加者人数は6日35名、7日41名であった。



小白川図書館 展示会場入り口

### (2) 特別講演会「伊佐早謙と林泉文庫 一知の巨人とその蔵書」



小白川図書館 第三章 林泉文庫の世界



小白川図書館 第四章  
うるま市立中央図書館の琉球関係資料調査

10月19日(木)、人文社会科学部1号館1階103教室を会場に特別講演を行った。講師は、長年米沢の郷土史を研究する市立米沢図書館郷土資料担当の青木昭博主幹。講演会では伊佐早の経歴や彼の蔵書「林泉文庫」の特徴・形成される過程、琉球関係資料と近年行われた調査について発表していただいた。聴講者からは「資料が遠く離れた土地と土地をつなぐというのは素敵だと思った」、「今回の講演を機会に、図書館やデジタルライブラリーを活用して林泉文庫などの貴重な本を読んでみたい」など様々な感想が寄せられた。所要時間は90分、参加者人数は75名。

## 5. おわりに

会期中、県内外から2,942名の方々が附属博物館・小白川図書館を訪れ、資料とその背景にある歴史を知ることとなった。伊佐早謙は、郷土史家として多大なる功績を残したが、時代が下るにつれ、その名は人知れず歴史の間に埋もれていった。本展を通し、彼の人物像やその功績、山形と沖縄の繋がりを紹介することで、学生や地域住民に、郷土の歴史に対する理解と



ギャラリートーク



特別講演会

関心を深める機会を提供できた。この点から当初の目的を達成できたと感じる。また、資料調査によって館内・県内に眠る貴重な資料を再発見し、今後の展示活用が期待されている。今後も、本展のような企画や公開講座を通して地域文化の向上に寄与する当博物館としての役割を担っていきたい。

資料リスト

	タイトル	著者	場所・時期・形態	旧蔵者	所蔵者
1.上杉茂憲と琉球	上杉茂憲・兼夫婦と子ども達(パネル)	江崎礼二	1888(明治21)年7月1日 古写真		個人
	伊佐早謙(パネル)	秋山写真館	(大正～昭和初期) 古写真		個人
	絵葉書(沖縄県各地名所)5点		昭和初期		山形県立博物館
	御膳本草	琉球 渡嘉敷通寛 撰	琉球 1832(尚瀨20)年	林泉文庫	小白川図書館
	首里城守礼門(パネル)		1881(明治14)～83(明治16)年 古写真		個人
	首里城内部(パネル)		1881(明治14)～83(明治17)年 古写真		個人
	通堂の船と町並み(パネル)		1881(明治14)～83(明治18)年 古写真		個人
	文官大礼服を着た上杉茂憲(パネル)	山本誠陽	1897(明治30)年代 古写真		個人
	琉球楽譜 工工四拾遺日録	琉球 編者不詳	琉球 古写本	林泉文庫	小白川図書館
	琉球三島并三十六嶋之図	林子平 書写者不詳	写本	林泉文庫	小白川図書館
琉球人登城並上野御宮参詣行列	琉球 編者不詳	琉球 古写本	林泉文庫	小白川図書館	
2.伊佐早謙の様々な顔 郷土史家・漢詩人 教育者・図書館人	伊佐早謙 肖像写真		昭和初期		個人
	恩榮紀詩	伊佐早謙 撰	1925(大正14)年		個人
	鶴城詩集(鶴城絶句抄)	伊佐早幸吉(謙) 輯	1879(明治12)年		小白川図書館
	故伊佐早謙先生閔歴	山形県立図書館 編	1930(昭和5)年9月		個人
	皇太子殿下御前講演祝賀 伊佐早先生招待会員名簿		1924(大正14)年10月24日		個人
	稿本清覽録	伊佐早謙 撰、米沢市役所 発行	1908(明治41)年		小白川図書館
	椀軒稿	伊佐早謙(君益) 撰	1926(大正15)年		小白川図書館
	西方君紀年碑拓本	伊佐早謙 撰、吉田善之助 刻	1899(明治32)年		長井市(文教の杜ながい)
	山形県史 全4巻	山形県内務部	1920(大正9)年	長井政太郎旧蔵	小白川図書館
	山形大学教育学部九十年誌	同編集委員会	1968(昭和43)年11月		小白川図書館
琉球文伝(沖縄県史料、近代)	伊佐早謙 輯	1983(昭和58)年		山形県立図書館	
3.林泉文庫の世界	伊佐早謙採集文書(複製本)	伊佐早謙	1887(明治20)～99(明治32)年		小白川図書館
	意山堂詩集	清 楊夢鯉(南甯甫) 撰	琉球 古写本	蔡大受旧蔵、林泉文庫	小白川図書館
	沖繩志 全5巻	伊地知貞壽 撰 重野安禎 校閲	1877(明治10)年		小白川図書館
	鶴城絶句鈔	伊佐早謙 輯	1884(明治17)年		小白川図書館
	官生鄭孝徳詩文集	琉球 鄭孝徳 撰	琉球 古写本	蔡德懋旧蔵、林泉文庫	小白川図書館
	喜安日記	喜安入道蕃玄 撰	写本 1924年河野彦一書写	林泉文庫	小白川図書館
	欽定国子監則例	清 官撰	清 1792(大正13)年刊	林世功旧蔵、林泉文庫	小白川図書館
	稿本清覽録	伊佐早謙 撰、米沢市役所 発行	1908(明治41)年		小白川図書館
	言上書写	琉球 毛有増 撰	琉球 古写本	林泉文庫	小白川図書館
	詩稿	琉球 林世勳 撰	琉球 古写本	林世勳旧蔵?、林泉文庫	小白川図書館
	詩文稿	琉球 林世勳 撰	1868(同治7)年	林世勳旧蔵、林泉文庫	小白川図書館
	椀軒絶句「飲風月樓」	宮本はるな 書	2017(平成29)年9月		個人
	大清道光二十七年時憲書 (朱墨套印本)	清 欽天監印造	1846(道光26)年刊	蔡大鼎旧蔵?、林泉文庫	小白川図書館
	陳楊園先生童子摺談 (琉球版本)	清 陳庚煥 撰	1844(道光24)年刊	浦添朝顯旧蔵、林泉文庫	小白川図書館
	呈文	琉球 編者不詳	琉球 古写本	林世勳旧蔵、林泉文庫	小白川図書館
	呈文	琉球 編者不詳	琉球 古写本	阮永吉旧蔵、林泉文庫	小白川図書館
	呈文	琉球 編者不詳	琉球 古写本	林世勳旧蔵、林泉文庫	小白川図書館
	呈文集	琉球 蔡大鼎 輯	琉球 古写本	蔡大鼎旧蔵?、林泉文庫	小白川図書館
	南島志	新井白石 撰	1719(享保4)年序 1856(安政3)年刊?	窪田蔵書印あり、林泉文庫	小白川図書館
	閩雜記	清 施鴻保 撰	1878(光緒4)年刊	林世功旧蔵、林泉文庫	小白川図書館
	北燕游草	琉球 蔡大鼎 撰	1873(同治12)年刊	林世功旧蔵、林泉文庫	小白川図書館
	琉球学士手抄	琉球 編者不詳	琉球 古写本	林泉文庫	小白川図書館
	琉球三十六嶋之図	林子平	写本	林泉文庫	小白川図書館
	琉球史料目録	沖縄県立図書館編	1924(大正13)年刊		小白川図書館
	琉球正使毛國棟詩	編者不詳	琉球 古写本	蔡德昌旧蔵、林泉文庫	小白川図書館
	琉球征伐記	著者不詳	古写本	旧蔵者不詳、林泉文庫	小白川図書館
	琉球藩史	小林居敬 編次 青江秀剛 補	1874(明治7)年刊	林泉文庫	小白川図書館
	琉球由来記	琉球 編者不詳	琉球 古写本	林泉文庫	小白川図書館
	林世功遺稿	編者不詳	琉球 1913年以降写本	林泉文庫	小白川図書館
	林泉文庫寄贈書及書目	伊佐早信 編	1937(昭和12)年		小白川図書館
山形県漢学者総覧稿 (山形大学紀(人文科学編)15巻4号)	長尾直茂	2004(平成16)年		小白川図書館	
4.うるま市立中央図書館 の琉球関係資料調査	意山堂詩集(複製本)	清 楊夢鯉(南甯甫) 撰	うるま市立中央図書館 2015(平成27)年 複製本		小白川図書館
	官生鄭孝徳詩文集(複製本)	琉球 鄭孝徳 撰	うるま市立中央図書館 2015(平成27)年 複製本		小白川図書館
	北燕游草(複製本)	琉球 蔡大鼎 撰	うるま市立中央図書館 2015(平成27)年 複製本		小白川図書館
	呈文集(複製本)	琉球 蔡大鼎 輯	うるま市立中央図書館 2015(平成27)年 複製本		小白川図書館
	琉球正使毛國棟詩(複製本)	編者不詳	うるま市立中央図書館 2015(平成27)年 複製本		小白川図書館
	林世功遺稿(複製本)	編者不詳	うるま市立中央図書館 2015(平成27)年 複製本		小白川図書館
	「伊計村遊草」訳注解説	高津孝 訳/解説 うるま市立図書館市史編さん係 編	2014(平成26)年		小白川図書館
	蔡大鼎『伊計村遊草』等調査研究事業 研究成果報告書	うるま市立図書館市史編さん係 編	2015(平成27)年		小白川図書館
	蔡大鼎漢詩精選集 漏刻楼集・欽思堂詩文集	紺野達也 訳/解説 うるま市立図書館市史編さん係 編	2015(平成27)年		小白川図書館
	蔡大鼎関連資料集 全8冊	うるま市立図書館市史編さん係 編	2014(平成26)年		小白川図書館
蔡大鼎の漢詩<うるま・琉球の風景>	紺野達也 訳/解説 うるま市立図書館市史編さん係 編	2015(平成27)年		小白川図書館	

## ≪展示活動≫

### オープンキャンパス特別展「没後 200 年記念 山形の算聖「会田安明」の軌跡」

佐藤 琴（附属博物館学芸研究員）

#### 1. 開催概要

主催：山形大学小白川図書館・山形大学数学教育研究センター・山形大学附属博物館

開催期間：2017年8月11日（金・祝）～9月29日（金）

休館日：土曜、日曜、祝日（8月11日（金・祝）、26日（土）、27日（日）は開館

会場：山形大学小白川図書館1階

来場者：1,586名

#### 2. 経緯

会田安明（1747～1817）は山形県に生まれ、江戸で活躍した和算家である。当時の和算は関孝和を開祖とする関流が主流派であった。和算を志した会田であったが、行き違いがあり関流に入門をせず、独自に研究を進めた。1781（天明元）年頃からは20年余にわたって関流との論争を行った。また、会田はこの間に新たな和算の流派「最上流」を旗揚げするとともに、優れた弟子を多く育てて東北地方の和算の発展に大きく貢献した。

小白川図書館には、山大の元教員や和算家のご遺族から寄贈された、会田安明および和算に関する貴重な資料群がある。これまでも折に触れて展示などで紹介してきた。

2017年8月26、27日に第13回全国和算研究大会および第26回東北地区和算交流研究大会が開催されることになり、主催者である山形県和算研究会より、理学部の協教授を介して是非とも小白川図書館の貴重な和算コレクションを公開してほしいとの要望があった。このため、オープンキャンパス（8月11日）特別展として本展を開催した。

#### 3. 展示の概要

##### ●会田安明の紹介

ご遺族から自叙伝（『自在物談』）および愛用の机、硯箱、算盤を借用

会田安明墓碑（会田先生算子塚）の拓本（個人蔵）

##### ●小白川図書館の和算コレクション

会田安明の直筆の著作

『算法本源集起源』『算法天生法』『貫通術』『諸約混一術』『算法則円集』

『算法天生法指南』（小白川図書館志鎌文庫）

#### 4. 関連企画「和算にチャレンジ」

会田安明の著作に出てくる和算に関する問題から、「初級編」「中級編」「上級編」の三つの数学問題をつくり、見学者の方に配布した。オープンキャンパスの当日には、正解者に小白川図書館のオリジナルグッズを渡した。100名以上の正解者があった。

#### 5. 小括

本展の開催により、和算には潜在的なニーズがあることがわかった。元々の愛好家はもちろんのこと、日本独自の数学という観点での、若い世代への働き掛けも有効である。また、小白川図書館が所蔵する貴重な和算コレクションについても今後とも周知を進めていく必要がある。



会田安明の紹介



関連企画「和算にチャレンジ」

## 《地域との協働》

### 市民との協働活動 ポローニャとの交流活動

佐藤 琴（附属博物館学芸研究員）

#### 1. 活動の経緯

2011年、山形大学は特別プロジェクト「井上ひさしの東北」の一環として「ポローニャの会」をスタートした。この勉強会の目的は、山形出身の劇作家である故井上ひさしの『ポローニャ紀行』を題材に、山形、そして東北の今後の街作りについて語り合い、行政などに対する市民からの提言をまとめていくことであった。その活動から発展して、実際にポローニャに赴き、現地の人々と交流する市民団体「チェントロ・ポルティコ研究会」が2014年に発足した。本団体はこれまで、ポローニャにおいては中学校の授業で俳句を初めとする日本文化を紹介したり、日本文化に関する講演会を開催してきた。また、ユネスコ創造都市ネットワークへの映画部門での加盟を目指す山形市を支援するために、音楽分野で加盟を果たしたポローニャの推進役であった、マウロ・フェリコーリ前ポローニャ市経済振興局長を招へいし、山形市長との対談のコーディネイトし、山形市民に対してユネスコ創造都市の効果に関して普及啓蒙する活動などを実施してきた。その甲斐もあって、2017年11月に山形市は創造都市ネットワークへの加盟を果たした。

山形大学附属博物館が、市民団体が主催するポローニャとの交流活動に参加することになった契機は二つある。まず、本交流活動にはポローニャ東洋美術研究所が全面的に協力している。この研究所は、1987年、東洋美術とその文化の普及を目的とし、ポローニャ大学の教授やローマ国立東洋美術館長らが中心となって設立された。東洋文化関係の蔵書は約1万冊にのぼり、イタリアで最も充実した東洋関係の図書館としても利用されている。この研究所にはイタリアにおける有数の浮世絵コレクターのコレクションが寄託されており、所長であるアレックスandro・グイディ氏が調査を行っている。グイディ氏は日本美術に対する深い知識を備えているが、調査対象である江戸時代後期の役者絵や源氏絵などには、さまざまな比喻や、当時の社会状況においては制作者と鑑賞者に共有されていた情報基盤に基づいた表現がなされており、その解説作業は日本人研究者でも一筋縄ではいかない。本調査にポローニャの会を主催してきた山本陽史教授（専門：日本文学）が2015年より全面的に調査に協力することとなった。その山本教授から、日本美術史を専門とする筆者（佐藤）にも調査への参加が要請されたことが一因である。

もう一つのきっかけは博物館の地域貢献のためである。当館は山形師範学校の郷土室をルーツに持ち、大学博物館のなかでも長い歴史を有する館の一つである。創設以来、地域文化の伝承および普及啓蒙を使命としてかかげ、少ない事業費をやりくりして、特別展は1976年より、公開講座は1981年からほぼ毎年実施

してきた。また、2013年度からは外部資金の調達にも積極的に取り組み、文化庁の補助事業「地域と共働した美術館・博物館活動支援事業」の採択を受け、「山形の古文書を未来に伝承するプロジェクト」を行った。近年の社会構造の変化により、急速に失われていきつつある地域の歴史を物語る文書の価値を訴え、伝承方法を模索していくために、2年間にわたって古文書相談会やシンポジウム、特別展などを実施した。2015年度は附属博物館の新施設が完成したため、移転および新展示室の整備事業に追われることが事前に分かっていたため、文化庁への事業申請はしなかった。

翌2016年度の文化庁の補助事業「地域の核となる美術館・博物館整備事業」への申請にあたっては新施設を獲得した山形大学附属博物館が地域に貢献すべきことは何かを模索した結果、「山形の文化遺産を世界に発信するプロジェクト」に取り組むこととした。文化庁の補助事業対象として一番に掲げられていたのが「地域文化の振興と国際発信」であったことと、山形の文化施設にとって外国人観光客の誘致の対応が喫緊の課題であると判断したためである。

そして、このプロジェクトの一つとしてイタリア・ボローニャとの交流活動に博物館が参加することとなった。

## 2. ボローニャ大学博物館との交流

市民団体がこれまでに実施した交流事業は大きく二つに分けることができる。一つはボローニャ大学の日本文化研究者や、例えば映画など、ありとあらゆる国で行われている文化活動を対象とするなか、日本とも関わりのある分野の研究者との交流である。彼らを山形に招き、イタリアからみた日本文化の魅力に関する講演会や、イタリアの伝統文化を伝えるワークショップなどを実施してきた。もう一つは上述のとおり、市民団体がボローニャを訪れて行った、日本文化を紹介する事業などである。

本項で紹介する筆者のボローニャ大学における講演会は、後者のボローニャにおいて日本文化を紹介する活動にあたるものである。

まず、実施概要は以下のとおりである。

講演名：「着物の文様に見る日本人の願い」

開催日：2017年9月21日(木)16:00～18:00

会場：ボローニャ大学博物館

参加人数：70人

本講演の目的は我々が協力した東洋美術研究所の浮世絵調査の成果をボローニャの市民に還元することである。東洋美術研究所は収蔵庫を備えていないため、コレクションはボローニャ大学博物館に保管を依頼している。そして、ボローニャ大学博物館にはこのコレクション専用の展示室が備えられており、点数は限られるが、開館期間中は常時コレクションを見学できるようになっている。加えて、日ごろから東洋美術研究所の理事長ジョヴァンニ・ペテルノッリ氏や先述のアレッサンドロ・グイディ氏が講演会を実施し、日本および東洋美術の普及に努めている。日本文化を熟知したイタリア人研究者の解説は、イタリアの人々の日本文化への関心を高めるためには最適であることはいままでもない。ただ、イタリア人とは異なった、日本人ならではの切り口というものもあるのではないかと考えたからである。

講演会の日には一年前に決定し、開催日の3カ月ほど前に展示作品のリストをお送りいただき、改めて日本において作品の調査を行った。講演のテーマは「着物の文様に見る日本人の願い」とした。現代の日本人にすら失われつつあることだが、日本の着物の柄や文様には植物や動物などのほか風景や雪などの気象など実にさまざまなものが素材として使用されている。しかも、これらのモチーフにはさまざまな吉祥への願いが込められている。また、西洋においては衣服の紋様に動植物や波などの自然現象を用いること自体それほど多くはないし、それらに幸福への願いを込めるなどはほとんど行われていないため、東西の文化の違いが

際立つと考えたからである。

講演にはボローニャ大学博物館やこれまで交流を重ねてきたボローニャ大学の教員の方々が広報して下さったおかげで 70 名の聴衆が集まった。大変熱心に講演を聞いていただき、終了後には着物の値段に関するものや、今回言及しなかった着物の文様に関する質問なども投げかけられた。

講演会場は東洋美術研究所のコレクション展示室の隣室であり、終了後に聴衆は隣の展示室に移動して思い思いに展示を話しながら見ていた。おそらく、それ



講演会「着物の文様に見る日本人の願い」

までは注目することのなかった浮世絵に描かれた着物の細部に目を向けて、それが何かなどを話していたのだらうと思われる。日本美術に対するさらなる理解を深めるという点はある程度成功したのだと思われる。

そして、この事業を通して見えてきたことは博物館資料の活用とは、必ずしも館蔵資料に限らないということである。博物館において収蔵資料に関する情報は目録や図録、現代においてはデータベースやデジタルアーカイブなどで、社会に対して公開し、さまざまな人々の利用に供することは博物館活動の基本である。資料は活用する人によってさまざまな面が引き出される。そのためにより多くの人々がアクセスできるようにしなければならない。所蔵機関にこだわらず、さまざまな人が活用できるようにすることが基本であることを改めて認識した。

今後もボローニャ東洋美術研究所およびボローニャ大学博物館における日本美術の普及活動を継続し、ボローニャにおける日本美術コレクションの価値を高めていく予定である。

## 《調査研究活動》

### 国際シンポジウム

佐藤 琴（附属博物館学芸研究員）

#### 1. 概要

事業名：国際シンポジウム「大学と美術の可能性を求めて」

開催日時：2017年10月14日（土）13:30～17:00

場所：人文社会科学部 103 教室

#### 【プログラム】

基調報告：「大学におけるアート・リソースの活用に関する研究」

五十殿利治（筑波大学芸術系 特命教授）

代読 後小路雅弘（九州大学人文科学研究院 教授）

事例報告：「ボローニャ大学博物館の取り組み」

ロベルト・バルツァーニ氏

（ボローニャ大学（イタリア）正規教授・ボローニャ大学博物館システム 総責任者）

代読 山本陽史（山形大学学術研究院教授）

事例報告：「山形大学附属博物館について」

佐藤琴(山形大学学術研究院 准教授)

事例報告：「東亜大学石堂博物館について」

池江伊(東亜大学石堂博物館(韓国) 学芸士)

ディスカッション

参加人数：30人

## 2. 小括

本シンポジウムにおける海外ゲストの2つの報告については科学研究費補助金 基盤研究 A 大学における「アート・リソース」の活用に関する総合的研究の平成29年度報告書『ユニヴァーシティ・アート・リソース研究3』に掲載した。内容についてはそちらをご参照いただきたい。本稿ではシンポジウムの成果について述べたい。

まず、本シンポジウムで再認識することができたことは、世界最古の大学であるボローニャにおいても、東亜大学石堂博物館のように国宝をも含んだコレクションを有し、日本統治下の建物をわざわざ購入して博物館として整備し積極的に活動を進めている館でも、博物館活動に対する大学当局の理解は十分とはいえず、予算や人員などの点が厳しいということである。

そして、展示の刷新や教育普及プログラムを幅広く実施することによって、大学博物館の存在意義を内外にアピールしている点である。博物館の展示および教育機能をとおして、その存在意義をアピールすることは日本だけの状況ではなく、海外の大学博物館においても共通の課題であることがわかった。

社会における大学博物館の認知は未だ十分ではなく、我々は一層の普及に努めていかなければならない。その取り組みの一つとして大学博物館が所在する地域を巻き込んだかたちでの国際的な大学博物館同士の連携は有効だと思われる。

大学博物館は地域文化の拠点となりうるポテンシャルを秘めている。しかし、そのことは未だ市民には浸透していない。市民の大学博物館への理解を深めるためには、やはり、市民とともに地域の課題に取り組むことが必要ではないだろうか。ボローニャ大学博物館も東亜大学石堂博物館も市民へのきめ細やかな教育活動を実施することによって地域の課題に取り組み、それによって市民の信頼を勝ち得ようとしていた。これらの事例にならい、山形大学附属博物館も市民と協働し、信頼関係を構築し、地域文化の拠点として内外に知られるようになることが必要である。



国際シンポジウム ディスカッション



『新編最上義光事歴』の再発見

押野 美雪(附属博物館学芸員)

1. はじめに

米沢出身の郷土史家、伊佐早謙(1858～1930：安政4～昭和5年)が著した『新編最上義光事歴』が最上義光に関する最初期の史料集であることが当館の伊佐早関連資料調査がきっかけとなってわかった。これに関連して、2017年12月21日の学長定例記者会見で再発見のプレス発表と、資料公開を同12月20日(水)から2018年1月30日(火)まで常設展示室歴史コーナーにて行った。

2. 『新編最上義光事歴』とは

本資料は、「長井政太郎収集文書」(当館発行『古文書近世史料目録第14号』34頁)に所収されている。概要は以下の通りである。

資料名・目録資料番号	寸法(cm)	ページ数	刊・写
『最上義光事歴 上』・11-5	28.5×20.5	141	写本
『最上義光事歴 中』・11-6	28.5×20.5	148	写本
『最上義光事歴 下』・11-7	28.5×20.5	165	写本

目録では資料名を「最上義光事歴」で統一しているが、『最上義光事歴 下』は実際には『新編最上義光事歴 三』である。しかし、内題は三冊全て「新編最上義光事歴」と書かれている。

資料には長井政太郎(1905～1983)の蔵書印「長井蔵書」と「山形大学蔵書」の朱印、山形大学が受入れた時の「山形大学附属図書館 本館 63.12.27」の青印が押されている。その他、図書館による資料整理シール、整理用貼紙が各1枚貼られている。

長井は1958年に当館初代館長に就任、後に本学教育学部(現地域教育文化学部)の学部長を務めた。地理学を専門とし、県内各地の古文書を収集している。本資料の入手について詳細は不明だが、長井が県内の古文書を収集したおりに林泉文庫の原本を写して所有していたものとみられる。同目録には他にも伊佐早謙関連の資料が見られ、長井が伊佐早の蔵書や林泉文庫に着目していたことが分かる。

内容は、最上義光が家督を継いだ1570(永禄13・元亀元)年、義光の立石寺への立願からはじまり、1622(元和8)年に改易された時から、1631(寛永8)年に義俊(義光の孫)が26歳で死去し、義智(義俊の嫡子)が後嗣するところまでを記述し、編年体で関係資料を網羅している。年次毎に、関係する記録、覚書、系図、軍記物、古文書等を収載し、年次の末尾に「按」として、伊佐早の按語(考察)を入れている。

伊佐早がまとめた最上義光についての史料集として『最上義光事歴』(1913(大正2)年以前に成立)、『最上義光公略伝』(1913年発行)、『新編最上義光事歴』がある。最初の『最上義光事歴』については現在所在不明ながら、『最上義光公略伝』の最上義光公三百年記念市祭協賛会による「編纂の趣旨」の中で、「(前略)本会は本市祭協賛行事の一として、公の事蹟を編纂し、之を世に公にし、公の事蹟を長く後昆に伝ふることとせり、是れ山形市今日あるの基を開きたる公を追憶する



『新編最上義光事歴』展示の様子

の一端に供せんか為めなり、依てこれか編纂を、山形市教育会に委嘱せしに、同会は、此際急遽稿を起し、苟且これに充てんよりは、寧ろ之を米沢の碩儒にして、曩に奥羽編年史料、及び最上義光事歴等を編述せる史家、伊佐早謙氏に委嘱するの捷徑にして且つ妥当なるに如かずとなし、同会より、氏に委嘱するに公の略伝を以てせしに、氏は之を快諾せられ、忙中旬余の日時を割き、之を撰述せられたるもの即ち此書なり、今若し事歴を以て公の詳伝とせば、本書は其の小伝となすへきか、(後略)」とあり、伊佐早に執筆を依頼した経緯が詳しく書かれている。おそらくその後、この二書を基にさらに加筆して作られたのが『新編最上義光事歴』と推定される。

### 3. まとめ

『最上義光事歴』と『新編最上義光事歴』はいずれも未刊行で、現在ではその存在すら忘れ去られてきたが、約百年前の最上義光研究の実証的に高いレベルを窺うことができ、研究史上重要な意義がある。また、現在でもなかなか見ることができない義光に関係する記録・覚書・古文書等の資料をほぼ網羅しており、編年史料集としての価値がある。しかし、伊佐早が引用した記述と原文書との比較や年次比定、本資料が写本である性格上、他に存在するであろう『最上義光事歴』・『新編最上義光事歴』との比較が必要である。今後これら の所在調査と、引用・参考にした著作物についての情報収集を課題としたい。

### 参考文献

栗野俊之『最上義光』(日本史史料研究会研究選書13) 日本史史料研究会企画部 (2017)

伊藤清郎『最上義光』吉川弘文館 (2016)

岩本篤志編『米沢藩興讓館書目集成 第四巻 林泉文庫書目 解題・解説』(書誌書目シリーズ9) 朝倉治彦監修, 株式会社ゆまに書房 (2009)

竹井英文『最上義光』(シリーズ・織豊大名の研究 第六巻) 戎光祥出版株式会社 (2017)

誉田慶恩『奥羽の驍将 - 最上義光 -』(日本の武将 60) 株式会社人物往来社 (1967)

『最上義光公略伝』最上義光公三百年記念市祭協賛會 (1913)

『最上義光公三百年祭誌』最上義光公三百年記念市祭協賛會 (1914)

### 付記

なお、本報告をまとめるにあたっては、伊藤清郎山形大学名誉教授より御教示を賜りました。ここに記して、厚く御礼申し上げます。

平成 29 年度事業報告

平成 29 年度に本館で実施した博物館実習の単位修得者数は下記のとおりです。

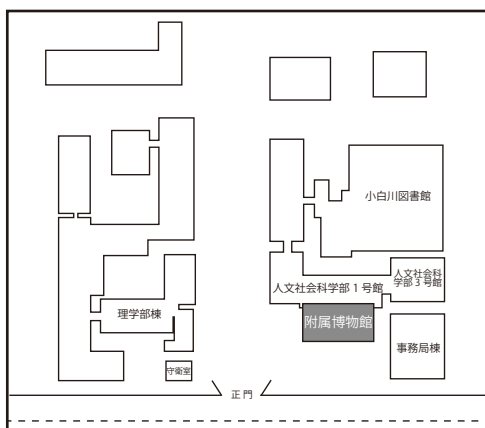
学 部	人 数
人 文 社 会 学 部	19
理 学 部	16
地域教育文化学部	11
科目等履修生	0
計	46

平成 29 年度入館者統計 (2017/4/1 ~ 2018/3/31)

入 館 者	個 人	12,304
	団 体	3,213
	計	15,513

お知らせ

附属博物館では、所蔵資料を授業等で利用していただけるよう、協力体制を整備しています。お気軽に職員までご相談下さい。



利用案内

開館時間 9:30 ~ 17:00

休 館 日 土曜・日曜・祝日（他臨時休館あり）

入 館 料 無料

アクセス

公共交通機関の利用／JR山形駅前より「ベニちゃんバス東くるりん東原町先回りコース」乗車「山大前」下車徒歩 2 分。

授業期間中の平日のみ山形大学専用駅循環シャトルバス運行。詳しくは山形大学HPをご覧ください。

山形大学附属博物館報 No. 44 2018. 4 発行 編集兼発行人 山形大学附属博物館  
 〒990-8560 山形市小白川町一丁目 4-12 TEL 023(628)4930 FAX 023(628)4668  
 URL <http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/museum/> Email [hakukan@jm.kj.yamagata-u.ac.jp](mailto:hakukan@jm.kj.yamagata-u.ac.jp)